

## スピノザの自由について

鈴石忠司

自由と必然性を対立的に捉える一般の見解に対して、スピノザがなぜ必然性を積極的に受容することこそが自由なのだ、という見解を対置したのか、その根拠を探ることが本論の趣旨である。その際、『エチカ』における実体・属性の関係を巡る議論、『往復書簡集』における完全性と欠如を巡る議論を中心に、スピノザに即して論旨を展開していきたい。

はじめに、存在の「必然性」となる実体について考察する。実体は「それ自身のうちにあり且、それ自身によって」(スピノザ／畠中尚志訳『エチカ―倫理学―上』岩波書店、三七頁)考えられる。そして、個物である様態は「他のものの内に在りかつ他のものによって考えられるもの」(同書、三七―三八頁)とされる。実体と様態を換言すると、実体は内的要因であり、様態は外的要因によって定義付けられる。だが、様態は「実体の変状」(同書、三七―三八頁)でもあるから「実体の属性である思惟と延長を有している。そのため、様態もこの内的要因である「必然性」を受容することが可能なのである。それ故に、自由と必然性を対立させるとい一般の見解を、スピノザは、「自己」の本性の必然性のみによって存在し・自己自身のみによって行動に決定されるものは自由である」(同書、三八頁)と批判し、「一定の様式において存在し・作用するように他から決定されるものは必然的である、あるいは強制される」

(同書、三八頁)とするのである。自由と対立するのは必然性でなく、強制なのである。様態が自由となるということは実体と属性を手掛かりに「必然性」を能動的に受け入れるということなのである。

次に、「必然性」を捉えようとする場合は、「完全性」について考察しなければならぬ。なぜなら、内的要因である実体と外的要因による様態の概念を捉えようと、完全である実体と不完全である様態の二元論に陥ってしまう可能性がある。スピノザは、「完全及び不完全とは実に単に思惟の様態にすぎない」(スピノザ／畠中尚志訳『エチカ―倫理学―下』岩波書店、八頁)とする。そして、スピノザは同様に「欠如」や「否定」についても意味をなさないとする。欠如と否定は、ある対象を比較することによって形成されるが、それは、思惟の様態の一側面である。このような一側面ではない「欠如」や「否定」に対してスピノザは、それらを実体の法則に則った概念であると捉えてはならないと批判する。「完全性」は他物と関係なしに、我々自身のうちに内在的なものとして現れるのである。それ故に、「必然性」は「完全性」であり、実体であるといえる。そして、「完全」「不完全」を比較する事に依る概念形成は誤謬であり、「それ自体では無」(スピノザ／畠中尚志訳『スピノザ往復書簡集』岩波書店、一二八頁)なのである。

外的要因に依拠しないスピノザの原則は、自由は決して意志の特質ではないということである。意志は、有限であろうと無限であろうと、あくまで思惟の様態であり、他の原因によって決定されているのである。例えその原因が思惟という属性の

元での実体の本性であっても変わりはなく、すべての存在するものは必然的に存在するのである。唯一自由な原因といわれるべきなのは、自己の必然性のみによって存在する場合なのである。実体が自由なのは、一切のものが実体の本性から必然的に生じるからであり、偶然的に創造されるからではないのである。自由は「内的な」必然性であり、「自己の」必然性なのである。そして、実体とは、存在そのものであるから、その存在そのものを、受容するのではなく、我々は実体の一部であるということを反省的認識によって受容する事によって自由になれるのである。

### ウエスレーのサタン理解

野村 誠

ジョン・ウエスレー(一七〇三—一七九一)が活躍した十八世紀は産業革命の時代で、その時代の人々は近代的、啓蒙的な側面があった。しかし、一方で、貧困なスラムに住む一般大衆は疫病に悩まされ依然として「呪術的な世界」の中で生きており、悪魔(Satan)の働きを信じていた。かくして、ウエスレーの説教の中の悪魔、悪霊といった概念が、民衆の心にわかりやすいメッセージとして届いたのではないかと考える。そこで、ウエスレーのサタン(Satan)理解を考察したいと思う。

山中弘は『イギリス・メソヂイズム研究』(ヨルダン社、一九九〇年)の中で、ウエスレーの説教について、「魔女、悪魔、

霊といったアルカイックな宗教的表象の实在を語り、信仰治療に肯定的に接するその宗教性は、公的宗教の圏外にいた人々のいなく民間信仰的な宗教性と親和性を帯びていたといっている(四六頁)と述べている。ウエスレーの説教と聖餐式、祈禱などは、「サタンとの対決」、あるいは「サタンの支配からの解放」を可能にする「恵みの手段」と理解できる。悪魔すなわち悪霊は、人の心の中で働き、人を地獄へ導いていく人格的存在である。説教「悪魔の策略」(Satan's Devices)『ウエスレー著作集5 説教下』(野呂芳男訳 新教出版社、一九七二年)でウエスレーは、悪魔を「陰險な神」と表現し、人格化というよりもむしろ神格化している。ウエスレーによれば「われわれ自身の劣悪さ・罪深さ・価値のなさを考えさせることによって、悪魔はわれわれの主における喜びを消そうと努める」(同、六頁)。賢く巧妙な悪魔は、われわれの弱さにつけ込み、人間の罪深さを思い起こさせ、神に近づくに値しない存在と自覚させることによって、神との関係を断絶させようとする策略家である。

説教「原罪」の中で、ウエスレーは語る。「悪魔はわれわれの心の上に、我意という悪魔自身の画像の刻印を押しした。悪魔は天から追い出される前に言った。『私は北の方いたる処に住みつこう』」(同、三七頁)と。こう述べたことから、ウエスレーは「悪魔は天にいた」と考えていたことがわかる。十三世紀から十八世紀にかけて魔女狩りが行われていたこと(ブリタニカ)からも理解できるように、一般民衆は悪霊の支配、魔女や呪術に怯えていた。悪魔の働きとは、人間を支配して、絶望、不安、貪欲、嫉妬、怒り、快樂、金銭欲、思い上がり、傲慢、